

彙報

二〇二二年四月より
二〇二二年三月まで

研究状況（二〇二一年度）

研究班

公募型研究班

「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や藝術についての学際的な研究

班長 外村 中

最終年度は四回の研究会（六月・九月・十二月・三月）を実施した。班長は資料蒐集が必要のため毎回来日したが、コロナ禍で二週間の待機期間を確保せねばならず、不足した滞在費を負担せざるを得なかった。研究会は班長と副班長が所内共同研究室で運営にあたり、オンラインを基調としつつも、一部希望者が対面参加するハイブリッド形式で行った。六月の第一回は、二〇二〇年三月に豫定されていたがコロナ禍で延期となった。「般若経」「維摩経」「大智度論」と関連作品」の回を改めて開催した。連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行い、最初の一本を班長、他三本を班員が担当した。第二回以降は一日のみの開催とし、各回とも二〜三名が、これまでにカバーできなかった領域に關する各論の報告を行った。三月の最終回には、班長による總括と

展望も行われた。三年間の発表全件への言及がなされ、個々の学術的意義を再確認して班員で共有することができた。

二〇二一年 六月 五日 『般若経』『維摩経』

『大智度論』と関連作品

『道行般若経』が説く「見える」

ものや「見えない」もの…般若

波羅蜜（すなわち大乘）とは

ブツダの「見えない」母である

発表者 外村 中

彌勒の圖像典據の變遷に關する

一考察——敦煌莫高窟を中心に

発表者 折山桂子

二〇二一年 六月 六日 『般若経』『維摩経』

『大智度論』と関連作品

幽靈能における〈幻〉…金剛般若

経・維摩経の思想と足利義持

政權期における能の變質

発表者 重田みち

中國北朝石窟の維摩・文殊圖像

発表者 向井佑介

二〇二一年 九月二五日 各論

佛身論に説かれる「見える」佛

と「見えない」佛——法身解釋
を中心に

発表者 魏 藝

雲岡石窟にあらわされた樂器に

ついて

発表者 大平理紗

神寶より見える、見えない日本の

神々の姿

発表者 清水 健

二〇二一年十二月一日 各論

『金光明経』が説く「見える」

ものや「見えない」もの…〈見

える〉靈鷲山のシヤカ）から

〈見えない〉もので、廣大無限

なる、法身のブツダ）へ

発表者 外村 中

中國の書齋圖から見えない古代

を見るための初歩的考察

発表者 吳 孟晉

二〇二二年 三月二六日 各論

『楞伽経』が説く「見える」も

のや「見えない」もの…〈眞

我〉は「常道」であり、〈初期

状態の「阿頼耶識」は「一な

る」ものである

発表者 外村 中

雲岡石窟の供養者像とその意義

発表者 黄 盼

佛像の出現時期について

發表者 内記 理
太極殿と大極殿をめぐる幾つか
の文學作品を讀む

發表者 古勝隆一

システム内存在としての世界についてのアートを
媒介とする文理融合的研究 班長 三輪眞弘

本年度の五回の研究會のうち四回は、豫定出版
社アルテスパブリッシングの編集者にも参加して
もらい、書籍媒體による成果まとめのための最終
報告にあてた。キーとなるテーマは「配信藝術」
であり、ライブによる藝術行為が電気メディアを
介在することでなお同一のものたりうるのか、あ
りうるとしたらどの側面においてか、あるいは別
のものが生まれる可能性はあるのかという議論が
焦點になった。具體的には「ライブが生命のメタ
ファーでありつづけてきたこと」、「ライブはす
でにテレビの登場以來電気メディアと一體になつて
いたこと」、「パフォーマンズ行為におけるスピリ
チュアリティの問題を眞剣にとらえること」が議
論の中心となった。研究會においては、いづれも、
藝術學および科學史および思想の研究、實驗科
學者、AI技術者、そしてアート実践者による、
「バイオ」と「メディア」をキーワードとして、
専門の枠を超えた學知融合の場を提供できたと考
える。

二〇二二年 四月二四日 切腹・沈没・大豫言

——一九七〇年と一九七三年を
中心に 發表者 片山杜秀

二〇二二年 七月一日 「配信藝術論」を考

える 發表者 岡田曉生

二〇二二年 九月二二日 配信藝術論と靈性亡
靈的機械としての映畫 發表者 佐近田展康

配信者の使命 發表者 佐藤淳二

二〇二二年十一月二三日 配信藝術の考古學テ
レビからメディアアートへ 發表者 松井 茂

受信觀察論 發表者 瀬戸口明久

二〇二二年 三月二二日 生命IIライブとして
の音楽「音楽非生命」をめぐる
て 發表者 岩崎秀雄

二分心崩壊以後・シンギュラリ
ティ以前 發表者 山崎雅史

清代と近代における經學の斷絶と連續：目錄學の
視角から 班長 竹元規人

本研究班は、清代から近代にかけての、中國學
術の斷絶と連續とを探究するという目標のもとに、
まず、前近代と近代との結節點のひとつである、
章學誠『文史通義』の譯注に取り組んできた。こ
のような見通しのもと、前年度に引き續き、『文
史通義』内篇に詳細や譯注を加えるべく、班員に
よる會讀をおこなった。本年度は、あわせて十四
回の會讀を実施し、『文史通義』卷五を譯了した。
これにより、『文史通義』内篇の全編を讀了した
こととなる。また、譯注稿の出版については、
『文史通義』内篇四譯注』として、『東方學報』

九六號(二〇二一年十二月)に掲載することがで
きた。現在、卷五の譯注稿を整理しつつあるとこ
ろであり、次號の『東方學報』への掲載を目指し
て作業中である。

二〇二二年 四月二〇日 「申鄭」篇會讀 發表者 古勝隆一

二〇二二年 五月一八日 「答客問上」篇會讀 發表者 渡邊 大

二〇二二年 六月 一日 「答客問中」篇會讀 發表者 内山直樹

二〇二二年 六月一五日 「答客問下」篇會讀 發表者 藤井律之

二〇二二年 七月 六日 「答問」篇會讀 發表者 田尻健太

二〇二二年 七月二〇日 「古文公式」篇會讀 發表者 重田みち

二〇二二年 十月一九日 「古文十弊(一)」篇 發表者 竹元規人

二〇二二年十一月 二日 「古文十弊(二)」篇 會讀 發表者 永田知之

二〇二二年十一月一六日 「浙東學術」篇會讀 發表者 福谷 彬

二〇二二年十二月 七日 「婦學(一)」篇會讀 發表者 古勝隆一

二〇二二年十二月二日 「婦學(二)」篇會讀 發表者 古勝隆一

二〇二二年 一月一八日 「婦學(三)」篇會讀 發表者 古勝隆一

二〇二二年 二月 一日 「婦學書後」篇會讀

二〇二二年 二月一日 「詩話」 篇會讀
發表者 新田元規

「日本の傳統文化」を問い直す
班長 重田みち

本年度は計六回の研究會を開催、美術史、工藝史、書道史、神道史、佛教史、文化史などの分野での検討を重ねた。中國・朝鮮をはじめとする諸外國との文化交流が傳統文化形成に與えた影響、禪宗寺院などの傳統文化形成における具體的な役割、近代以降に成立するナショナル・ヒストリー的な枠組みによる研究展開の到達點と問題點、等々の論點を再考した。

二〇二二年 六月二〇日 松崎謙堂の和習重視

發表者 古勝隆一

コメンテーター 神津朝夫

Differences in shippo-yaki research between Japan and the West
發表者 シビル・ギルモント

コメンテーター 吳 孟晉

二〇二二年 九月 五日 日本書道史における

中國風・日本風言説の諸相——
平凡社『書道全集』を例として

發表者 成田健太郎

コメンテーター 重田みち

近代日本の文物をめぐる營爲と
龍門石窟

發表者 稲本泰生

コメンテーター 高階繪里加

二〇二二年 十月三十一日 阿彌號からみる同朋

衆と時衆——『經覺私要鈔』を
一例として 發表者 今枝杏子

コメンテーター 柳 幹康

「神國」の中の孔子——『古今著
聞集』から見えてくること

發表者 水口拓壽

コメンテーター 陳 佑眞

二〇二二年十二月一九日 泉涌寺流の宋式僧院
生活と實踐宋文化受容の一事例
としての「茶」「花」

發表者 西谷 功

コメンテーター 上川通夫

本研究班前半の總括と今後の展
望——付：近現代における「同
朋衆」概念 發表者 重田みち

二〇二二年 一月二三日 花道史における中國

瓶花 發表者 井上 治

コメンテーター 重田みち

中江兆民による朱子學受容

發表者 福谷 彬

コメンテーター 外村 中

二〇二二年 三月二三日 大阪壺井八幡宮八幡
神及諸神坐像と中世の神佛關係

發表者 田中健一

發表者 稲本泰生

京大人文研で「日本の傳統文
化」を問い直すために——歴代
所員の業績の再検討のころみ、

林屋辰三郎『町衆』を中心に

發表者 菊地 暁
コメンテーター 神津朝夫

實驗性の生態學——人新世における多種共生關係
に關する比較研究

班長 モハーチ ゲルゲイ

本年度は、初年の最後の研究會でまとめた六つの研究焦點の整理を行い、人文學の方法と現場をつなぐという水平思考の基盤を固めた。モハーチ（班長）は「metabolic togetherness」、石井（副班長）は「unwell and biodiversity conservation」、森田は「transition design」、瀬戸口は「laboratory and fieldwork」、鈴木は「experiments in decomposition」、中空は「experiments in decolonial politics」、石川は「ethnographic experiments」という課題を中心に人新世における實驗性の個別研究を進めてきた。モハーチは「Toxic Remedies: On the cultivation of medicinal plants and urban ecologies」（刊行）「Healing together: The coexistence of humans and plants in the Anthropocene」（作成中）などの學術論文において、日本語の「共生」の概念を用いることにより、國際的に注目されつつある人新世研究の蓄積に新たな視點を加えることを試みた。年度末のリポート形式の共同研究會において、六つの焦點を三つに絞るための議論を行い、來年度以降の假の課題組として（一）「多種共生の實驗」（二）「生活としての實驗」（三）「人新世という實驗」を設定した。

二〇二二年 三月 一日 多種共生の実験・生活としての実験・人新世という

実験

コメンテーター モハーチ ゲルゲイ

Research Focus for Experimental Ecologies

コメンテーター 班員全員

佛教天文学説の起源と變容 班長 小林博行

今年度は研究班の發足當初から、感染症擴大のためオンラインでの共同研究会開催を餘儀なくされるなど、當初の研究計畫を大幅に變更して活動を行った。こうした計畫の變更はあったものの、オンラインでの宿曜經研究会と、個々の班員による讀解、資料調査を着實にすすめることができた。それにより、『宿曜經』の成立と翻譯の文化的背景、現存寫本のテキスト異同と書寫系統などについて重點的に検討し、共同研究会においてその成果に關する討議をおこなった。また、本研究班の目標の一つに掲げている『佛國曆象編』譯稿の作成についても、卷一のすべてと卷二の大半の譯稿を集約し、整理を進めた。次年度以降、残りの卷の譯稿の検討・編集へと進む豫定である。加えて、研究班豫算で『宿曜經』『佛國曆象編』の諸版本や『曆象考成』の寫本を購入し、今後の研究・譯稿作成に必要な史料を備えた。

二〇二二年 四月二六日 宿曜經研究会研究班

の今後の方針等について

發表者 小林博行

二〇二二年 六月二八日 宿曜經研究会『宿曜

經』卷上 28b07～31a08

發表者 白雲飛

二〇二二年 七月二六日 宿曜經研究会『宿曜

經』卷上 31b09～大尾

發表者 清水浩子

二〇二二年 九月二七日 宿曜經研究会『宿曜

經』卷下 01a01～05a04 西國毎

一分分白黒兩分

二〇二二年 十月二五日 宿曜經研究会『宿曜

經』の讀み方

發表者 小林博行

二〇二二年十一月二日 宿曜經研究会『宿曜

經』卷下 05a05～07b04 二十七

宿十二宮圖 發表者 平岡隆二

二〇二二年十二月二七日 宿曜經研究会『宿曜

經』卷下 07b05～10a04 二十七

宿所爲吉凶曆(昴宿)

二〇二二年 一月二四日 宿曜經研究会『宿曜

經』卷下 10a05～12a06 二十七

宿所爲吉凶曆(房宿)

二〇二二年 二月二日 宿曜經研究会『宿曜

經』下卷 12a07～14b09 畢翼斗

壁此四 發表者 宮紀子

東アジア災害人文学の構築

本年度は計五回の研究会を実施した。第一回研

發表者 班長 山泰幸

二〇二二年 五月 八日 續發する社會破談イ

ナミクスと持續可能な地域復興プロセス——三〇餘年の

ワールド研究から

二〇二二年 七月二四日 東アジアの「災、禍、

難」と人新世の風土論

發表者 岡田憲夫

二〇二二年 九月二三日 Participatory Re-

search Focus for Experimental Ecologies

發表者 張政遠

Search in Humanities and Social Sciences - an initiative to open up IDRIM transdisciplinary dialogue- Resilience in a Collaborative Ethnography of Disaster

発表者 Yuchi Sekiya (關谷雄一)

Some remarks on sediment hazard risk management from the archaeological viewpoint

発表者 Makoto Tomii (富井 真)

Improving governance of systemic risk with insights from community narratives

発表者 Ian Chabay 司會 Norio Okada (岡田憲夫)

二〇二二年十一月三日 滋賀県下の明治二九年水害と記念碑

発表者 市川秀之 二〇二二年 三月一七日 ポスト災害——復興

時代、東アジア災害人文學の可能性：災害が續く時代において、持續可能な生活世界をどのように模索するか。

コロナ以降の時代と日本社會 (災害と災害の隔たり)

発表者 梶谷眞司

パンデミックと人間行動

発表者 大西正光 二〇二二年 三月一八日 ポスト災害——復興

時代、東アジア災害人文學の可能性：災害が續く時代において、持續可能な生活世界をどのように模索するか。

日本における災害弱者とSDGs について 発表者 關谷雄一

ポスト・パンデミック世界の新しい社會・環境理論に向けて 班長 香西豊子

本年度は、十回にわたり、研究會を重ね、パンデミックの歴史的、社會學的、哲學的な分析の手法について學んだ。研究班員以外では、寫眞家の澁谷敦志氏をお招きし、コロナ禍の病院で前線で働く看護士たちの様子を伺ったり、撮影された寫眞を見て議論をしたりした。また、醫療の哲學を研究している村岡潔氏もお招きし、私たちが舊來、病氣と名指しているものを、相對的に、また客觀的に捉え直す方について學んだ。

二〇二二年 四月 三日 パンデミック班第六回研究會

藤野裕子著『民衆暴力——一 揆・暴動・虐殺の日本近代』書評 発表者 藤原辰史

二〇二二年 四月一九日 パンデミック班第七回研究會

A I Mによる體内のゴミ掃除と

いう觀點からみた對新型コロナウイルス ウイルス戰略

発表者 宮崎 徹 二〇二二年 五月一七日 パンデミック班第八回研究會

感染症史の論點(二)

発表者 香西豊子 二〇二二年 六月一四日 パンデミック班第九回研究會

コロナ病棟の現場から

発表者 澁谷敦志 二〇二二年 七月 五日 パンデミック班第一〇回研究會

近世天草地方の疫病對策

発表者 東 昇 二〇二二年 十月 四日 パンデミック班第一一回研究會

「江戸時代の感染症」史研究の論點

発表者 海原 亮 二〇二二年十一月一日 パンデミック班第一二回研究會

人類學と人獸共通感染症・生權

力に抗う(種間)倫理の探究 発表者 石井美保 二〇二二年十二月一三日 パンデミック班第一三回研究會

『感染症と法の社會史』とコロナ禍

発表者 西迫大祐 二〇二二年 一月一七日 パンデミック班第一

四回研究会

醫學哲學の基本的スタンス・特定病因論と先制醫療感染症と生活習慣病を例に
 発表者 村岡 潔

二〇二二年 二月一四日 パンデミック班第一
 五回研究会

幕末期における「豫防」概念の
 転回 発表者 香西豊子

東方ユーラシア馬文化の研究

研究班一年目である本年度は、共同研究室での少数対面と、Zoomによるオンライン會議とを併用し、合計六回の研究会を開催した。六回の定例研究会を通じて、ユーラシア草原地帯の馬具、東アジア馬具の製作技法の系譜、中國中世における馬車から牛車への轉換、日本列島における初期の馬と鹽の關係などの問題を議論し、また外部からゲスト研究者を招いて遺跡出土馬の理化學分析の成果や日唐の馬匹管理・交通制度の問題などについて議論を深めた。また、それらとは別に、本研究班の前身となる過去二年間の若手A班の研究成果にもとづき、十一月に一般向けのシンポジウム「考古學からみた古代東アジアの馬利用」を開催し、ユーラシア西方におけるウマの家畜化から騎乗まで、その古代中國への傳播と變容、そして中國における馬の育成の問題、騎馬文化の東傳の問題などを論じた。來年度にはシンポジウムの内容をもとにした一般向けの書籍刊行も豫定している。

二〇二二年 五月二一日 曹操高陵出土馬具が

提起する問題

二〇二二年 六月一八日 駿馬と鈍牛——東アジア古代の車社會史
 発表者 岡村秀典

二〇二二年 七月一六日 遺跡出土馬の理化學分析から探る東アジアの馬飼育
 発表者 覺張隆史

二〇二二年 十月二九日 ユーラシアの馬具と馬裝
 発表者 大谷育恵

二〇二二年 一月二一日 唐代厩牧令の復原と日唐の馬匹管理・交通制度
 発表者 河野保博

二〇二二年 二月一八日 馬と鹽の關係について——古墳時代中後期の奈良盆地の事例を起點に
 発表者 青柳泰介

二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 班長 浅井佑太

本年度は當初四月および八月の二回の研究会を對面で豫定していたが、コロナのため海外在住者二名が歸國できず、どちらもズームに切り替えた。発表内容は、十九世紀の作曲行爲の下部構造としての樂器技術の問題、マーラーを例とするオーケストラヴィンスキーの無限變奏と「作品」の非所在、ストラヴィンスキーにおける「カット&ペースト」的な手法および時間藝術としての音樂の否定とその空間化、ウェーベルンの創作手法の科學實驗的なものへの接近である。この二回の研究会の

議論の焦點となったのは、とりわけ「二〇世紀における音樂詩學のラディカルなパラダイムチェンジ」である。そして新音樂を切り拓いた一連の作曲家（シェーンベルク、ストラヴィンスキー等）に對するマラルメの絶大な影響を考えると、マラルメの詩學について文學研究からの示唆を得る必要から、さらに三回目の研究会を追加した。

二〇二二年 四月 四日 二〇世紀音樂におけるスケッチとは何だったのか
 発表者 浅井佑太

二〇二二年 八月一五日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年 八月一五日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 八月一五日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 八月一六日 二〇世紀作曲家における創作プロセスと語法創造
 コメンテーター 岡田曉生

バストラランペット/テナーホル
ンの諸問題…《ニーベルングの
指環》前後の作曲家と楽器製造
の關係をめぐって

發表者 秋山良都

コメンテーター 岡田暁生

コメンテーター 伊東信宏

二〇二二年 二月一六日 マラルメあるいは象

徴について 發表者 佐藤淳二

〔時間―生〕 藝術の研究―ボードレールとその
受容 班長 小倉康寛

本研究班はボードレール生誕二〇〇周年記念シ
ンポジウムを組織・開催することを目標に、班員
相互で実施にむけた非公式の打ち合わせを重ね、
二〇二二年十二月一七日、一八日の二日にわたつ
て「ボードレール生誕二〇〇周年記念〔時間―
生〕藝術の研究―ボードレールとその受容」を
開催した。近代における時間概念について再考し
ながら、ボードレールの現代における意義を明ら
かにする一方で、その影響の廣がりや後續の作家
たちや、音楽や哲學といった他ジャンルのうちに
探っていく試みは、シンポジウムの報告と議論に
よって一定の成果をあげることができた。

二〇二二年十二月一七日 ボードレール生誕二

〇〇周年記念〔時間―生〕藝術
の研究―ボードレールとその
受容 司會 廣田大地

司會 坂卷康司

『人工樂園』における時間と空

間 發表者 清水まさ志
タイムマシン・ボードレール

發表者 廣田大地

ボードレールにおける『現在の
表現』とジャーナリズム

發表者 佐々木稔

渴きと時間―分裂と『悪の
花』のコーラージュ

發表者 小倉康寛

ボードレールとヴァレリー―
「蛇」をめぐる變装

發表者 鳥山定嗣

二〇二二年十二月一八日 ボードレール生誕二
〇〇周年記念〔時間―生〕藝術
の研究―ボードレールとその
受容 司會 坂卷康司

司會 森本淳生

ボードレールが終わったところ
から始める戦い―マラルメの文
學的〔生〕について

發表者 中畑寛之

瞬間と疲労―初期レイヴィナス
におけるボードレール解釋

發表者 服部敬弘

「萬物照應」、ドビュツシーと
ボードレールの時間

發表者 青柳いづみこ

多様性と「生命力の移動」

發表者 平野啓一郎

東方學研究部
近現代中國の制度とモデル 班長 村上 衛

本年度は三年計畫の二年目にあたり、若手・中
堅の報告を中心に實施した。新型コロナウイルス
の感染擴大がみられたが、昨年度同様、原則とし
てオンラインと對面の併用で、計一七回の研究會
を行い、延べ六九二人の参加者を得た。對面の参
加者は學内から多数を占めたが、オンライン化
により、國內のみならず、海外からの参加者も増
加し、對面のみでの時期の研究班参加者数が二〇
（二五人ほどであったのに對して、今年度の参加者
数は平均で四〇人を超えている。コメンテーター
は専門を重視して遠方からの招聘も豫定していた
が、今年度も大半がオンライン参加となった。い
ずれの報告に關しても、遠方の参加者からコメン
トをいただけるのがオンライン開催の大きなメ
リットとなった。なお、本研究班と關連して、現
代中國研究センターでは合評會を四回開催した。

二〇二二年 四月二三日 近現代中國の制度と
モデル 洋行から華商へ―清代
後期同安縣の寄付事例より 發表者 村上 衛

二〇二二年 五月一四日 近現代中國の制度と
モデル 近世末期（十九世紀中
葉）、久米村士と琉清關係―魏
姓楚南家を中心に 發表者 張 子康

- 二〇二二年 五月二十八日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 山田浩世
 モデル 中國語という思想問題
 の戦前から戦後へ—日本放送協
 會「中國語講座」を手がかりに
 發表者 溫 秋穎
- 二〇二二年 六月一日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 村田雄二郎
 モデル 清前期マンチュリアに
 おける家族・法・社會
 發表者 王 天馳
- 二〇二二年 六月二十五日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 杉山清彦
 モデル 日本統治期臺灣漢人農
 民の行動原理—機會と情理
 發表者 都留俊太郎
- 二〇二二年 七月九日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 板垣龍太
 モデル 山中商會と一九三六年
 のロンドンにおける中國藝術國
 際展覽會 發表者 範麗雅
- 二〇二二年 十月一日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 木島史雄
 モデル 清末の廟制改革と政爭
 —穆宗神牌升附問題を中心に
 發表者 田子晃矢
- 一九四〇年代上海における越劇
 コメンテーター 矢木 毅
 女優と過房娘
- 二〇二二年 十月二十五日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 中山 文
 モデル 「配流刑の時代」の終
 焉—『大清新刑律』と配流刑
 廢止の宣言
 發表者 手代木さづき
- 二〇二二年 十月二十九日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 喜多三佳
 モデル 梁啓超の救國方針の轉
 換—人物評價の視點から
 發表者 キム・ハンバク
- 二〇二二年 十一月二日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 石川禎浩
 モデル William A.P. Martin
 譯『萬國公法』・『公法便覽』・
 『公法會通』の翻譯方針—いわ
 ゆる無差別戰爭觀の漢譯文を手
 がかりに 發表者 望月直人
- 二〇二二年 十一月二十六日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 藥袋佳祐
 モデル 現代中國における秘密
 保持制度の形成とその實態
 發表者 周 俊
- 二〇二二年 十二月一日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 谷川眞一
 モデル 從英國檔案看清末中國
 外籍海關稅務司的幾個面相
 發表者 李 培德
- 二〇二二年 一月四日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 馮 錦榮
 モデル 清代官員の裁判と刑罰
 —官員犯罪に對する諸問題を
 めぐつて 發表者 趙 嵩
- 二〇二二年 一月二十八日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 中村正人
 モデル 二〇世紀前半における
 中國水産人材の育成およびその
 活動—海賊對處・漁民救済や
 「水産知」の傳播を中心に
 發表者 楊 峻懿
- 二〇二二年 二月一日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 伊藤康宏
 モデル 清代北京の治安と保甲
 發表者 堀地 明
- 二〇二二年 三月四日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 村上正和
 モデル 宗族と革命に關する一
 考察—清末民初期・廣東省信
 宜縣のばあい
 發表者 宮内 肇
- 二〇二二年 三月十八日 近現代中國の制度と
 コメンテーター 片山 剛
 モデル 一九二〇年代中國の米
 穀流通空間—長江デルタ市場

の再編を中心に

発表者 篠根拓人
コメントーター 辨納才一
龍門北朝窟の造像と造像記 班長 稲本泰生

コロナ禍の影響で基本的にオンライン、一部対面併用で研究会を実施した。龍門最古の窟で、造像記の数も最も多い(約七〇〇件)古陽洞の全壁面の検討が、前年度末を以て完了したことを承け、本年度は北朝窟のうち、文字史料の豊富さ(約八〇件)では同洞につぐ蓮華洞について、検討を行った。古陽洞のときと同様、造像記だけに注目するのではなく、無紀年・無銘分も含めた全ての造像について、壁面のブロック単位で網羅的に検討する作業を進め、二〇二一年二月までに約三分の二を終了した。造像記を検討する通例の

會に加え、班長が「北朝六世紀前半期の佛傳圖像若干について——安塞眞武洞大佛寺第四窟など」、易丹韵氏が「南北朝・隋唐時代の須彌山圖と法界佛像」、佐藤智水氏が「『望ましき死後の世界のイメージ』造像銘から探る豫備的考察」、倉本尙徳氏が「隋代造像記からみた北周の廢佛と隋文帝の佛教復興——河北地域を中心として」と題する研究発表を行った。

報 彙

二〇二二年 五月一日 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 稲本泰生
二〇二二年 六月 八日 研究報告・北朝六世紀前半期の佛傳圖像若干について 発表者 高志 緑

て——安塞眞武洞大佛寺第四窟など 発表者 稲本泰生

二〇二二年 六月二二日 研究報告・南北朝・隋唐時代の須彌山圖と法界佛像 発表者 易 丹韵
二〇二二年 七月一三日 研究報告「『望ましき死後の世界のイメージ』造像銘から探る豫備的考察」 発表者 佐藤智水

二〇二二年 七月二七日 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高志 緑
二〇二二年 十月二二日 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 稲本泰生
二〇二二年 十月二六日 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高橋早紀子
二〇二二年十一月九日 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高橋早紀子
二〇二二年十二月二四日 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高橋早紀子
二〇二二年 一月二五日 蓮華洞南壁造像記の再検討 発表者 富岡采花
二〇二二年 二月 八日 蓮華洞南壁造像記の再検討 発表者 富岡采花
二〇二二年 三月 八日 研究報告・隋代造像記からみた北周の廢佛と隋文帝の佛教復興——河北地域を中心として 発表者 倉本尙徳

前近代ユーラシア東方における戦争と外交

班長 古松崇志

研究テーマの「前近代ユーラシア東方における戦争と外交」について具體的に考察するための題材として、南宋時代の史書『三朝北盟會編』の會讀を進めた。一六回にわたって『三朝北盟會編』の會讀をおこない、『中華再造善本』所收の中國國家圖書館(北京圖書館)所藏の明鈔本を底本に、テキストの校訂・譯注作業を進め、巻十四から巻十八までを讀み終えた。

二〇二二年 四月一三日 『三朝北盟會編』巻十四會讀 発表者 齊藤茂雄
二〇二二年 四月二七日 『三朝北盟會編』巻十四會讀 発表者 濱野亮介
二〇二二年 五月一日 『三朝北盟會編』巻十四會讀 発表者 藤原崇人
二〇二二年 五月二五日 『三朝北盟會編』巻十四會讀 発表者 武田和哉
二〇二二年 六月 八日 『三朝北盟會編』巻十五會讀 発表者 高井たかね
二〇二二年 六月二二日 『三朝北盟會編』巻十五會讀 発表者 矢木 毅
二〇二二年 七月一三日 『三朝北盟會編』巻十五會讀 発表者 飯山知保
二〇二二年 七月二七日 『三朝北盟會編』巻十五會讀 発表者 伊藤一馬
二〇二二年 十月二二日 『三朝北盟會編』巻十六會讀 発表者 毛利英介
二〇二二年 十月二六日 『三朝北盟會編』巻十六會讀 発表者 古松崇志
二〇二二年十一月三〇日 『三朝北盟會編』巻

- 十六會讀 發表者 福谷 彬
 二〇二二年十二月一四日 『三朝北盟會編』卷十七會讀 發表者 藤本 猛
 二〇二二年十二月二八日 『三朝北盟會編』卷十七會讀 發表者 遠藤總史
 二〇二二年 一月一日 『三朝北盟會編』卷十七會讀 發表者 若本真利繪
 二〇二二年 一月二五日 『三朝北盟會編』卷十八會讀 發表者 船田善之
 二〇二二年 二月 八日 『三朝北盟會編』卷十八會讀 發表者 井黒 忍
 二〇二二年 二月二日 『三朝北盟會編』卷十八會讀 發表者 古松崇志
 二〇二二年 二月二日 『三朝北盟會編』卷十八會讀 發表者 森下章司
- 三世紀東アジアの研究 班長 森下章司
 本年度は、研究室における少數對面とZoomによるオンラインとを併用し、前期六回、後期一回、合計一六回の研究會を実施した。特に本年度に重點的に検討を進めたのが、河南省洛陽西朱村曹魏大墓から出土した三〇〇點あまりにおよぶ三世紀の石牌銘文である。この曹魏大墓出土石牌の注釋作成と、個人の研究報告を二本の柱として共同研究を実施した。曹魏石牌銘文については合計八回の検討會を通じて、先行研究の分類を再整理して既往の解釋を見直し、新たな注釋を作成した。一方、班員とゲスト研究者による個人の研究報告を合計八回實施し、竹林の七賢(劉伶)、高句麗古墳壁畫の思想、ガラス玉の流通、三世紀の西域の狀況、漢唐間における服制の變遷、東アジアの鐵製武器、後漢・曹魏の鏡についての調査研究成果などが報告された。一連の共同研究を通じて、三世紀東アジアの文物について、制度・儀禮・思想・地域間交流などさまざまな視點から議論を深めた。
- 二〇二二年 四月二三日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(一) 遺策・衣物 疏・榻・曹魏墓出土石牌檢討の前に 發表者 森下章司
 二〇二二年 五月二四日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(二) 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋・飲食類 發表者 森下章司
 二〇二二年 五月二八日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(三) 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋・起居類 發表者 向井佑介
 二〇二二年 六月一日 三世紀東アジアの文物と思想(一) 劉伶「酒德頌」…その文學史上の意義とテキストの問題點 發表者 金 文京
 二〇二二年 六月二五日 三世紀東アジアの文物と思想(二) 高句麗壁畫古墳の昇仙思想…龕神塚への「天への階段」から 發表者 南 秀夫
 二〇二二年 七月 九日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(四) 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋・起居類(一) 發表者 向井佑介
 二〇二二年 十月 八日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(五) 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋・起居・騎乘・佩劍類 發表者 森下章司
 二〇二二年 十月二二日 三世紀東アジアの文物と交流(一) ガラス玉の流通からみた紀元三世紀 發表者 大賀克彦
 二〇二二年十一月二日 三世紀東アジアの文物と交流(二) 三世紀頃の西域・『魏略』西戎傳に記された世界 發表者 内記 理
 二〇二二年十一月二六日 三世紀東アジアの文物と交流(三) 漢唐間における服制史概観…朝服制度の變遷を中心に 發表者 小林 聰
 二〇二二年十二月 三日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(六) 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋・首飾・佩飾・禮樂類 發表者 森下章司
 二〇二二年十二月一七日 三世紀東アジアの文物と交流(四) 黑塚古墳出土鐵器…三世紀の鐵器 發表者 水野敏典
 二〇二二年 一月一四日 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘釋(七) 洛陽西朱村

曹魏墓出土石牌銘釋・禮樂類
 (樂器) 發表者 森下章司
 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘
 釋・遊戯類 發表者 向井佑介
 二〇二二年 一月二八日 洛陽西朱村曹魏墓出
 土石牌銘釋(八) 洛陽西朱村
 曹魏墓出土石牌銘釋・遊戯類補
 遺・文房類ほか/曹操高陵出土
 石牌銘選擇 發表者 向井佑介
 曹操高陵出土石牌
 二〇二二年 二月 四日 三世紀東アジアの文
 物と交流(五) 中國で発見さ
 れた景初三年鏡/畫紋帶神獸鏡
 の東傳・型式と鉛同位體比から
 みた九子派の動態
 發表者 岡村秀典
 二〇二二年 三月一八日 洛陽西朱村曹魏墓出
 土石牌銘釋(九) 曹操高陵・
 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌の性
 格 發表者 森下章司
 洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘
 釋・總括と展望 發表者 向井佑介

前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社會

う數頁を残すところまで読み進むことができた。
 史料會讀についてはオンライン形式はそれなりに
 適合性が高いと考える。ただ、最後まで會讀し、
 譯注を整える作業が残っているため、一年間の延
 長を行うこととした。
 二〇二二年 四月 九日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 隣接地域の社會と文化 川本正知
 二〇二二年 五月一四日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 五月二八日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 六月一一日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 六月二五日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 七月 九日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 九月二四日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 十月二二日 前近代内陸アジアと

二〇世紀中國史の資料的復元

隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年十一月一二日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年十一月二六日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年十二月一〇日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 一月一四日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 一月二八日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 二月二五日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇二二年 三月一一日 前近代内陸アジアと
 隣接地域の社會と文化 ヘラー
 二〇世紀中國史の資料的復元 班長 石川禎浩
 隔週金曜午後の研究班例會を開催することを中
 心に活動を進めた。班員は五二名、毎回の研究班
 例會の出席者は二〇名強であった。昨年引き續

き新型コロナウイルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイフレックス方式による開催となったが、幸い平常時と同様の規模・質を維持することができた。特にオンライン開催であることはいかして、新たに東京・九州・中華人民共和国で活躍する複数の研究者による積極的な参加を得られたのは収穫であった。年度内の例会開催回数は一五回を敷え、毎回事前にレジュメを班員に配布し、またコメントーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、議論が活発に行われた。本年度は最終年度であり、研究班の課題である「資料的復元」にかんする班員の理解も深まりつつあるものの、新型コロナウイルス拡大の影響により、班員各位の資料収集活動が充分に行えなかったことは否定できない。そこで、研究班全体として、納得のいく解釋を提示できる見通しを得るべく、班の活動を延長することにした。

- 二〇二二年 四月一六日 戦没臺灣人の慰靈事業と在日臺灣人(一九六〇年代)
 代) 発表者 岡野翔太
 コメントーター 坂井田夕起子
 二〇二二年 五月 七日 海馬宣言と文壇の市場化
 発表者 瀬邊啓子
 コメントーター 比護 遙
 二〇二二年 五月二一日 國民政府期における永定河治水
 発表者 島田美和
 コメントーター 都留俊太郎

二〇二二年 六月 四日 梁啓超「中國國會制度私議」考
 発表者 森川裕貴
 コメントーター 岡本隆司

二〇二二年 六月一八日 満洲スポーツ史の基礎資料とその問題点
 発表者 高嶋 航
 コメントーター 谷 雪妮

二〇二二年 七月 二日 日本の在華資産をめぐる賠償處理問題について
 発表者 團 陽子
 コメントーター 岡野翔太

二〇二二年 九月二四日 毛澤東時代の「内部雑誌」
 発表者 周 俊
 コメントーター 丸田孝志

二〇二二年 十月 八日 毛澤東と集團指導制
 発表者 谷川眞一
 コメントーター 和田英男

二〇二二年 十月二二日 戦時日本の國民精神
 總動員運動刊行資料に見る中共イメージ
 発表者 鄒 燦
 コメントーター 蒲 豊彦

二〇二二年十一月 五日 建國初期の青年知識人の社會主義受容の構造的要因
 発表者 鄭 成
 コメントーター 水羽信男

二〇二二年十一月一九日 「文化漢奸」の裁判：張資平を例に
 発表者 祝 世潔
 コメントーター 瞿 艷丹

二〇二二年十二月 三日 日本の中國近代思想・文學研究史の基礎史料
 発表者 小野寺史郎
 コメントーター 坂元ひろ子

二〇二二年 一月二一日 畫家・溥儒の來日に ついて
 発表者 吳 孟晉
 コメントーター 朱 琳

二〇二二年 二月 四日 反右派論争における「右派言論集」
 発表者 林 禮釗
 コメントーター 中村元哉

二〇二二年 三月一一日 ジェームズ・カントリー Sun Yat-sen and the Awakening of China 再讀
 発表者 小堀慎悟
 コメントーター 深町英夫

古典中國語のコーパスの研究 班長 安岡孝一
 古典中國語(漢文) Universal Dependenciesを檢討しつつ、實際にコーパス化をおこなった。具體的には、詩文として『楚辭』と『唐詩三百首』を、漢譯佛典として『佛說阿彌陀經』『金剛般若波羅蜜經』『維摩詰所說經』『摩訶般若波羅蜜大明呪經』を檢討対象とし、順次コーパス化をおこなった。また、これらのコーパスのうち、檢討が終了したことから、Universal Dependencies 2.8.1ならびに Universal Dependencies 2.9.2(以下、カレル大學 LINDAT/CLARIN と共同で WWW 公開した。また、これまでの研究成果を、論文「古典中國語(漢文) Universal Dependencies とその

應用』としてまとめ、情報処理學會論文誌二〇二二年二月號に掲載した。

二〇二二年 四月 九日 『楚辭』の Universal

Dependencies 化

二〇二二年 四月二三日 『漢文訓讀の初期條件(初稿)なぞ孤立語を膠着語に變換できたのか?』

二〇二二年 五月 七日 『古漢語音韻データベース「諸家詩經韻讀」の構築』

二〇二二年 五月二一日 Universal Dependencies 2.8.1

二〇二二年 六月 四日 『織田佛教大辭典』の語彙分類

二〇二二年 七月 二日 『世界の Universal Dependencies と係り受け解析ツール群』

二〇二二年 七月一六日 『佛說阿彌陀經』の Universal Dependencies 化

二〇二二年 七月三〇日 東洋學へのコンピュータ利用第三回研究セミナー 説文小篆に對する漢字構造記述の試み 發表者 守岡知彦 司會 安岡孝一

二〇二二年 九月 三日 『金剛般若波羅蜜經』の Universal Dependencies 化

二〇二二年 九月一七日 『維摩詰所說經』の Universal Dependencies 化

二〇二二年 十月 一日 『面向多領域先秦典

籍的分詞詞性一體化自動標注模型構建』

二〇二二年 十月一五日 日本語・現代中國語・古典中國語・タイ語係り受け解析ツール esupar

二〇二二年十一月 五日 NINJAL サロン第二二八回「日本語 Universal Dependencies における單語分かち書き」報告

二〇二二年十一月一九日 Universal Dependencies 2.9

二〇二二年十二月 三日 『日本中世和化漢文における非使役「令」の機能』

二〇二二年十二月一七日 じんもんこん二〇二二年 一報告

二〇二二年 一月二二日 『唐詩三百首』の Universal Dependencies 化

北朝石窟寺院の研究Ⅱ 班長 岡村秀典

中國山西省大同市に所在する雲岡石窟の原報告(水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全十六卷三二冊、一九五二〜一九五六年)第十五卷「西端諸洞」の圖版解説、および京都大學人文科學研究所・中國社會科學院考古研究所編『雲岡石窟』第二〇卷(科學出版社東京、二〇一七年)の研究成果をもとに、洛陽遷都後の雲岡石窟について検討した。また、人文研所蔵拓本をもとに、原報告第二卷所收「雲岡金石錄」のうち北魏から遼金時代までの石刻を悉皆的に會讀し、その成果を「雲岡石刻錄」(假題)として來年度の『東方學報』に

發表する豫定である。新型コロナウイルス感染症の影響が讀めない中、研究會は Zoom により共同研究室でのオンラインとオンラインのハイブリッド形式で實施した。東京など國內の遠隔地や海外の研究者も参加できるように、共同研究のネットワークを廣げる試みにも取り組んだ。

二〇二二年 六月二九日 雲岡石窟西端諸洞 發表者 岡村秀典

二〇二二年 七月二〇日 雲岡石窟西端諸洞 發表者 岡村秀典

二〇二二年 十月 五日 雲岡石窟西端諸洞 發表者 岡村秀典

二〇二二年 十月一九日 雲岡石窟西端諸洞 發表者 岡村秀典

二〇二二年十一月一六日 雲岡石窟西端諸洞 發表者 岡村秀典

二〇二二年 一月一八日 雲岡金石錄の再檢討 發表者 倉本尙徳

二〇二二年 二月 一日 雲岡金石錄の再檢討 發表者 倉本尙徳

二〇二二年 二月一五日 雲岡金石錄の再檢討 發表者 倉本尙徳

二〇二二年 三月一五日 雲岡金石錄の再檢討 發表者 倉本尙徳

中國在家の佛教觀…唐道宣撰『廣弘明集』を讀む

今年度は『廣弘明集』卷二十六に收める梁の武帝「斷酒肉文」を會讀し、昨年から繼續して二〇二二年十二月に全文を讀み切り、譯注を作成した。

續いて同月に班長が全體を振り返り、「梁武帝『斷酒肉文』の特徴」と題する總括をした。その後、在家信徒の佛教觀を示す原典資料として『廣弘明集』卷十九に収める一連の著作の會讀を始めた。

- 二〇二一年 四月一六日 中國在家の佛教觀
梁武帝「斷酒肉文」會讀
發表者 中西龍也
- 二〇二二年 五月 七日 同 同
發表者 魏 藝
- 二〇二二年 五月二一日 同 同
發表者 趙ウニル
- 二〇二二年 六月 四日 同 同
發表者 倉本尙徳
- 二〇二二年 六月一八日 同 同
發表者 船山 徹
- 二〇二二年 七月 二日 同 同
發表者 船山 徹
- 二〇二二年 九月一七日 同 同
發表者 稲本泰生
- 二〇二二年 十月 一日 同 同
發表者 中村愼之介
- 二〇二二年 十月一五日 同 同
發表者 船山 徹
- 二〇二二年 十月二九日 同 同
發表者 趙ウニル
- 二〇二二年十一月一九日 同 同
發表者 魏 藝
- 二〇二二年十二月 三日 同 同

二〇二一年十二月二七日 同 梁武帝「斷酒肉文」の特徴
發表者 船山 徹

二〇二二年 二月一八日 同 陸雲「御講波若經序」
發表者 船山 徹

二〇二二年 三月 四日 同 同
發表者 魏 藝

チベット文明の繼承と史的展開の諸相
班長 池田 巧

コロナ禍の影響でB班の研究報告書『チベットの歴史と社會』の刊行が遅れ、企畫していた出版記念講演會を開催することができなかった。そのためC班として一年間の活動の繼續延長を行った。研究報告書『チベットの歴史と社會』出版記念講演會は、人文研アカデミーの活動の一環として企畫し、ウエブセミナー形式の連續講座を前期に四回にわたって開催した。連續セミナーの終了後は、研究班の月例會を繼續し、後期は研究情報の交換を行うとともに、令和四年度からの新たな共同研究班の開催準備などを行なった。また三月上旬には東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所の基幹研究との共催で、東京外大AA研にてシンポジウム「詩歌から廣がるチベット世界」を開催した。

二〇二一年 四月一七日 人文研アカデミー二〇二二『チベットの歴史と社會』出版記念連續セミナーヒ
マラーヤ世界のウチとソト…受容と交流のチベット史

二〇二二年 五月一五日 人文研アカデミー二〇二二『チベットの歴史と社會』出版記念連續セミナー
高地における家畜との暮らし…チベット高原の牧畜社會
司會 池田 巧
發表者 別所裕介

二〇二二年 六月一九日 人文研アカデミー二〇二二『チベットの歴史と社會』出版記念連續セミナー
言語文化の繼承と變容…廣がりゆくチベット語の世界
司會 岩尾一史
發表者 星 泉

二〇二二年 七月一七日 人文研アカデミー二〇二二『チベットの歴史と社會』出版記念連續セミナー
日常の信仰と世界觀…チベットの民間宗教とボン教
司會 池田 巧
發表者 村上大輔
發表者 小西賢吾

二〇二二年 十月一六日 研究情報交換會

二〇二二年十二月一八日 研究班月例會 アム

ド・チベット語におけるモンゴル語からの借用語——牧畜文化語彙を中心に

発表者 海老原志穂

ミボー (mi bogs) 関連文書を讀む・チベット舊社會における身分・契約・自由をめぐる諸問題
発表者 大川謙作

二〇二二年 二月一九日 研究班月例会 研究概要紹介

発表者 ドルジュエツェデン

『清朝支配の形成とチベット』(汲古書院) 刊行によせて

発表者 岩田啓介

二〇二二年 三月 五日 シンポジウム「詩歌から広がるチベット世界」

司會 星 泉

詩と歌をめぐる議論・チベット學會パネルディスカッション Q & A
発表者 ジャブ エチュードとしての古典詩・チベット文學の本質に迫る

発表者 根本裕史

長いヤンタル

発表者 大川謙作

詩歌とリズム

発表者 星 泉

詩歌と朗讀

発表者 ラジャブン

朗讀ワークショップ

発表者 ラジャブン

占いと詩歌 発表者 西田 愛

Pelliot tibétain 1286 と Pelliot tibétain 1287——原型「王統譜」・「宰相譜」から現狀二巻本

「古代チベットクロニクル」の生成

発表者 今枝由郎

総合討論

コメンテーター 崔 境眞

二〇二二年 三月 六日 シンポジウム「詩歌から広がるチベット世界」

司會 星 泉

口承文學の傳統と詩歌

発表者 三宅伸一郎

現代詩と女性

発表者 海老原志穂

古代の記憶と詩歌

発表者 岩尾一史

ゲンドウン・チュンベルの詩的世界

発表者 三浦順子

文人ツェリン・ワンゲルが生き

た時代 発表者 小松原ゆり

総合討論

コメンテーター 岩田啓介

東方文化研究所舊藏漢籍の整理と研究

班長 矢木 毅

『和刻本十選』と題する圖録を東アジア人文情報学研究センターより刊行し、リポトリ紅にも

掲載した。また「印譜の會」の名義で連續セミナー「はんこの文字の話」(オンライン)を開催し、八月二六日、九月二日、九月九日、九月一六日の四回にわたって、學生及び一般市民、のべ七五名(スタッフを除く)の來聽を得た。

二〇二二年 四月二一日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 矢木 毅

二〇二二年 四月二八日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 矢木 毅

二〇二二年 五月二一日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 矢木 毅

二〇二二年 五月二六日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 高井たかね

二〇二二年 五月二九日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 高井たかね

二〇二二年 五月二六日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 高井たかね

二〇二二年 六月 二日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 高井たかね

二〇二二年 六月 九日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 高井たかね

二〇二二年 六月 二三日 東方文化學院京都研究所漢籍目録集部別集類金元之

屬 発表者 永田知之

- 二〇二二年 六月三〇日 東方文化學院京都研
究所漢籍目錄集部別集類金元之
屬 發表者 永田知之
- 二〇二二年 七月 七日 東方文化學院京都研
究所漢籍目錄集部別集類金元之
屬 發表者 福谷 彬
- 二〇二二年 七月一四日 東方文化學院京都研
究所漢籍目錄集部別集類金元之
屬 發表者 福谷 彬
- 二〇二二年 七月二一日 東方文化學院京都研
究所漢籍目錄集部別集類金元之
屬 發表者 福谷 彬
- 二〇二二年 七月二八日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部經注疏合刻類
發表者 藤井律之
- 二〇二二年 十月一三日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部易類
發表者 古松崇志
- 二〇二二年 十月二〇日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部易類
發表者 古松崇志
- 二〇二二年 十月二七日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部易類
發表者 古松崇志
- 二〇二二年十一月一七日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 宮宅 潔
- 二〇二二年十一月二四日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
- 二〇二二年十二月 一日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 宮宅 潔
- 二〇二二年十二月 八日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 宮宅 潔
- 二〇二二年十二月二五日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 矢木 毅
- 二〇二二年十二月二二日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 矢木 毅
- 二〇二二年 一月 五日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 高井たかね
- 二〇二二年 一月二二日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 高井たかね
- 二〇二二年 一月一九日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 高井たかね
- 二〇二二年 一月二六日 東方文化研究所續増
漢籍目錄經部書類
發表者 永田知之
- 漢籍共同研究システムの構築
班長 ウィットティルン クリスティアン
今年度は五年計畫の初年度になります。毎回の
研究会はZoomで行い、オーストラリアからロー
ロッパまで海外からの参加者が多いため、日本時
間の午後五時からの異例な形でスタートしました
が、初めての顔合わせからスムーズに実施できま
した。年度の初めから先ず班長から研究班の目的
と実施方法を説明し、そして班員から自らの研究
テーマと研究班で目指している共同研究プラット
フォームについて報告を行いました。間にはプ
ラットフォームの現状についての報告や、テーマ
別の総合的な議論も行いました。また、共同研究
で行う譯注の實際の作業の實驗として、劉劭(二
世紀―三世紀ごろ)の「人物誌」の會讀を始めま
した。
- 二〇二二年 四月二三日 General introduc-
tion
發表者 Wittern, Christian
- 二〇二二年 五月一四日 A closer look at
TLS: its history in comparative
perspective, its aspirations and
its implementation in Filemaker
發表者 Harbsmeier, Christoph
- 二〇二二年 五月二八日 How to Do Things
with Semantic Ontologies: The
Conceptual Taxonomy of the
TLS
發表者 Schwermann, Christian
- 二〇二二年 六月一日 Overview of CHISE:
its Chinese Character ontology
and some applications
發表者 Morioka, Tomohiko

- 二〇二二年 六月二十五日 Searching for Knowledge: Discovery of Term Clusters Across Primary Sources with DocuSky
 発表者 Stanley-Baker, Michael
 二〇二二年 七月 九日 A closer look at hxxwd. org and how the TLS is implemented there
 発表者 Wittern, Christian
 二〇二二年 九月二十四日 TLS Practice: Reading 人物誌
 司會 Harbsmeier, Christoph
 二〇二二年 十月 八日 TLS Update on technical issues
 発表者 Wittern, Christian
 二〇二二年 十月二十二日 TLS Practice: Reading 人物誌
 司會 Harbsmeier, Christoph
 二〇二二年十一月二日 TLS Practice: Reading 人物誌
 司會 Harbsmeier, Christoph
 二〇二二年十一月二十六日 How to locate ex-geometrical hot spots? A wish list arising out of a laboratory report involving commentaries on "The Lord that Resides in the Clouds" (雲中君) from the anthology Songs of Chu (楚辭)
 発表者 Schimmelpfennig, Michael
 二〇二二年十二月一日 New developments in the TLS database
 発表者 Wittern, Christian
 二〇二二年 一月 一四日 Some thoughts on medium-term desiderata for the TLS, focusing on text search functionality
 発表者 Plassen, Jorg
 二〇二二年 一月二十八日 Next steps for the TLS Website
 発表者 Wittern, Christian
 秦漢法制史料の研究 班長 宮宅 潔
 嶽麓書院所藏簡《秦律令(壹)》の會讀を進め、約八〇簡を讀了した。その成果の一部は「譯注稿その(四)」として、『東方學報』誌上に發表した。同時に、譯注の單行本化に向けて、付載する研究ノートの豫備發表を開始した。里耶秦簡(壹)の會讀もこれと平行して行い、これについては關係論文を中國・武漢大學のHP「簡帛網」に投稿し、掲載された。
 二〇二二年 四月 二日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 313-324
 発表者 宮宅 潔
 二〇二二年 四月 九日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 313-324
 発表者 宮宅 潔
 二〇二二年 四月 一六日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 313-324
 二〇二二年 四月 二日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 325-336
 発表者 宮宅 潔
 二〇二二年 四月 三〇日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 325-336
 発表者 鷹取祐司
 二〇二二年 五月 七日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 325-336
 発表者 鷹取祐司
 二〇二二年 五月 一四日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 325-336
 発表者 鷹取祐司
 二〇二二年 五月 二一日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 337-345
 発表者 鷹取祐司
 二〇二二年 五月 二八日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 337-345
 発表者 畑野吉則
 二〇二二年 六月 四日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 337-345
 発表者 畑野吉則
 二〇二二年 六月 一一日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 346-353
 発表者 畑野吉則
 二〇二二年 六月 一八日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 346-353
 発表者 齊藤 賢
 二〇二二年 六月 二五日 嶽麓簡會讀嶽麓 [肆] 346-353
 発表者 齊藤 賢

- [肆] 346-353
 發表者 齊藤 賢
 二〇二一年 七月 二日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 354-363
 發表者 藤井律之
 二〇二一年 七月 九日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 354-363
 發表者 藤井律之
 二〇二一年 七月 一六日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 354-363
 發表者 藤井律之
 二〇二一年 七月 二〇日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 364-373
 發表者 目黒杏子
 二〇二一年 九月 三日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 364-373
 發表者 目黒杏子
 二〇二一年 九月 一〇日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1145~⑧ 1187
 發表者 宗周太郎
 二〇二一年 九月 一七日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 364-373
 發表者 目黒杏子
 二〇二一年 九月 二四日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1074~⑧ 1109
 發表者 佐藤達郎
 二〇二一年 十月 一日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 374-382
 發表者 安永知晃
- 二〇二一年 十月 一五日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1145~⑧ 1187
 發表者 宗周太郎
 二〇二一年 十月 二二日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 374-382
 發表者 安永知晃
 二〇二一年 十月 二九日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1145~⑧ 1187
 發表者 宗周太郎
 二〇二一年 十一月 五日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 374-382
 發表者 安永知晃
 二〇二一年 十一月 一九日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1145~⑧ 1187
 發表者 宗周太郎
 二〇二一年 十一月 二六日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 383-391
 發表者 章 瀟逸
 二〇二一年 十二月 三日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1145~⑧ 1187
 發表者 宗周太郎
 二〇二一年 十二月 一〇日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 383-391
 發表者 章 瀟逸
 二〇二一年 十二月 一七日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1188~⑧ 1221
 發表者 畑野吉則
 二〇二一年 一月 七日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 383-391
- 二〇二二年 一月 一四日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1110~⑧ 1143
 發表者 目黒杏子
 二〇二二年 一月 二一日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 383-391
 發表者 章 瀟逸
 二〇二二年 一月 二八日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1188~⑧ 1221
 發表者 畑野吉則
 二〇二二年 二月 四日 嶽麓簡譯注考證篇豫
 備發表「廷内史郡二千石官共
 令」をめぐって
 發表者 宮宅 潔
 二〇二二年 二月 一八日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1188~⑧ 1221
 發表者 畑野吉則
 二〇二二年 二月 二五日 嶽麓簡譯注考證篇豫
 備發表 質 發表者 宗周太郎
 「君子」・「君子子」小考
 發表者 齊藤 賢
 二〇二二年 三月 四日 里耶秦簡會讀里耶秦
 簡⑧ 1110~⑧ 1143
 發表者 目黒杏子
 二〇二二年 三月 一一日 嶽麓簡譯注考證篇豫
 備發表 屬・尉佐
 發表者 西 眞輝
 二〇二二年 三月 一一日 嶽麓簡會讀嶽麓
 [肆] 383-391
 發表者 林 怡冰

二〇二二年 三月一日 里耶奏簡會讀里耶奏
簡⑧1110-⑧1143

發表者 目黒杏子

人文學研究部 近代京都と文化

班長 高木博志

本年度は一回、延べ二人の發表者による共同研究會を開催した。コロナ下でZoomでの開催が主であった。若手からベテランまで、また専門分野の多様性においても學際的な共同研究を遂行できた。また四月例会の柏木知子・松川綾子報告は對面で行い、併せて吉田山周邊の掃苔を行った。

十一月四日には京都文化博物館で『太夫さん女體は哀しく』（一九五七年）の映畫上映と木下千花報告を、十一月二三日には大谷大學博物館において東本願寺と京都畫壇の展覽會を觀覽し國賀由美子報告を議論した。今年度は「近代京都と文化」研究班の最終年度である。研究成果報告書に向けて、大正期の文學・美術・思想・映畫が連動して起さるロマン主義的思潮、農民藝術・民藝・學術における戦時下の日本主義、京都の外からあるいは歴史からと時空をこえて「京都文化」を相對化する議論を深めた。

環境問題の社會史的研究

班長 岩城卓二

本年度も昨年度に引き続き歴史學を中心に文化人類學・社會學・哲學など多彩な研究者が参加し、一七回の研究會（オンライン／内二回は書評會）を開催した。報告はすべて録畫し、報告者の許可を得た上で、視聽を希望する班員にデータを提供

した。本年度は當初の豫定通り歴史學・文化人類學の實証的研究報告を中心に研究會を開催した。環境破壊が社會問題化したケースだけでなく、山野河海を活かしたヒトの生きる力について焦點をあてた研究報告が多く、今後の研究班の方向性としては、必ずしも社會問題化したケースにこだわることなく、生きる力について議論を深めていく豫定である。なお研究班のもう一つの柱である史料整理と古文書解讀會は、對面式の實施が困難であったため、本年度も開催できなかった。

國際比較研究

班長 竹澤泰子

一、本年度は、フランスEHESSの「EPS」との共同研究を進め、オンラインにてフランス側と日本側の執筆者・コメンテーターを交えて研究會を重ねた。そのうち五回の座談會は、論文集にも掲載した。二、『環太平洋地域の移動と人種』の英語版を出版するにあたり、共通フレームをより明確にするための研究會を行なった。三、自然人類學者と文化人類學者による「人間の「ちがひ」と差別」について共同研究を行なった。四、二〇一八年秋に客員教授として受け入れたStephen Snell（UCバークレー）教授とミックス・レイスに關する共同研究を行なった。

二十一世紀の人文學

班長 岡田曉生・小關隆・佐藤淳二

コロナ禍の到來は、本研究班にある種の仕切り直しを要請するものであった。ある種の「抜き打ちテスト」としてのコロナ禍は單に新型ウイルス

によるパンデミックを引き起こしただけでなく、現代社會が抱え込むさまざまな「暗部」を顕在化させたのであり、それに伴って、人文學にはこれまでの研究がいわば「暗黙の前提」としてきた数々の想定が根底的に揺らいでいることを直視し、それを再審して、とるべき方向性を模索すること求めているからである。私たちが直面しているのはパンデミックをその一部とする「二〇二〇年問題」に他ならない、「二〇二〇年問題」全體に對峙せずして先の展望は開けない、という認識に立脚して、今年度はあらためて「人文學 Beyond 2020」という總括的なテーマを設定し、哲學・思想や歴史學の領域における新たな可能性を考える趣旨の報告を連ねた。

帝國日本の「財界」形成についての研究…一八九五年—一九四五年

班長 籠谷直人

當初の計畫豫定より大幅に進捗が遅れているため、本年度から研究班を二年間延長して、次年度は主に「日本財界と臺灣」を主題として研究會を開催しする豫定であったが研究代表者の病氣のため入院で、研究會開催ができなかったため班員にそれぞれに課題を設定依頼することにした。次年度はそれをもとに報告書を作成する豫定である。

藝術と社會——近代における創造活動の諸相

班長 高階繪里加

三年計畫の第二年度である本年は、計一〇回の研究會を開催した。第一回研究會は四月一〇日に開催、高階秀爾氏により「アウラの嘘と夢——W、

ベンヤミンの『複製技術時代の藝術作品』をめぐって」と題し、W.ベンヤミンの概念「アウラ」と「藝術と社會」との關係をめぐる發表が行われた。第二回研究會は五月二十九日に開催、藝術と「分解」の概念をテーマとして、藤原辰史氏による發表「捨てられたもの」の藝術について」が行われた。第三回研究會は六月二十四日に開催、藤本眞名美氏による發表「近代京都の歴史畫家・谷口香崎について」が行われ、これまであまり注目されなかった京都近代の歴史畫家についての新しい知見が發表された。第四回研究會は七月二四日に、板橋區立美術館及び京都文化博物館における展覽會「さまよえる繪筆」に關連して「東京・京都戦時下の前衛畫家について」と題する發表が清水智世氏と弘中智子氏により行われた。第五回研究會は九月一日に池田さなえ氏により、「京都美術工藝界を支えた人びと——ノードとしての品川彌二郎」と題し、政治家として知られる品川彌二郎の藝術支援とそのネットワークに關する發表が行われた。第六回研究會は一〇月一六日に、竹内幸繪氏により、明治から昭和にかけて畫家・デザイナーとして廣告の分野で活躍した杉浦非水に關する發表「杉浦非水論大正から昭和初期の發言と作品をもとに」が行われた。第七回は十一月一二日に、松原史氏により京都を中心とする近代刺繍産業に焦點を當てた發表「社會を寫す近代の刺繍——作品から見る刺繍の新たな展開——」が行われた。第八回は二月一八日に、小川佐和子氏により「オベレッタにおける社會諷刺——ハプス

ブルク帝國期から戦間期の作品をみる」と題し十九〜二〇世紀ヨーロッパの政治・社會と大衆文化に關連する發表が行われた。第九回は二〇二二年一月二十九日に郷司泰仁氏により「村山、朝日と展覽會」と題し、朝日新聞創業者で藝術文化に多大な貢獻を果たした村山龍平とその展覽會事業に關する發表が行われた。第十回は二〇二二年三月一二日にイリナ・ホルカ氏により、「明治後期におけるメディアの中の「モデル」……倫理・表象・職業」と題し、近代日本の文學と美術におけるモデルにまつわる様々な問題に關する發表が行われた。いずれの研究會においても、發表後に藝術と社會に關わる活發な議論が交わされた。

ポストリヒューマン時代の起點としてのフランス象徴主義 班長 森本淳生

研究初年度にあたる本年度は、研究計畫に基づく各メンバーの擔當を踏まえた研究報告を行い（計二一名）、象徴主義に關する各人の知見——韻律、理論、録音、雜誌、文學キャバレー、アナキズム、宗教、話法、演劇など——の共有に努めるとともに、今後の研究方向についても議論を重ねた。平行して、ルネ・ギルの『至善の生成 (Le Meilleur devenir)』譯讀會を行い、日本語譯と譯註の作成を進めた（計四回開催）。ギルの作品は象徴主義の一面を示す重要なものであるが、きわめて難解であり、この詩人のマイナー性もあって、フランスにおいてすらこれまで十分に讀解されてこなかった。本作の理解を共有することで、今後議論を進めていくうえでの班員共通のプ

ラットフォームが構築される効果も期待できる。譯讀自體はテキストの難解さのため思ったよりも進まなかったが、研究報告は順調に行うことができた。毎回活發な議論が行われる有意義な研究會となっており、實施狀況は良好である。

個人研究

東方學研究部

川西走廊の漢藏諸語の記述研究 池田 巧
 中國共產黨史の研究 石川禎浩
 イスラーム東漸史の研究 稲葉 穰
 東アジア佛教美術史の研究 稲本泰生
 佛教研究知識ベース——禪佛教を例として

WITTERN, Christian

古代中國の考古學研究 岡村秀典
 中國注釋學史研究 古勝隆一
 中央アジア東部の佛教文化 FORTE, Erika
 インド・中國における佛教の學術と實踐 船山 徹
 十〜十三世紀ユーラシア東方における王朝開闢係の研究 古松崇志
 秦漢制度史の研究 宮宅 潔
 高麗官僚制度研究 矢木 毅
 文字コード理論 安岡孝一
 六朝隋唐佛教史の研究 倉本尙徳
 中國繪畫史の研究 吳 孟晉
 中國イスラームの研究 中西龍也

- 中國中世近世の文學理論 永田知之
 東アジア傳統科學の研究 平岡隆二
 歴史考古學的方法にもとづく中國文化研究 向井佑介
 近代華南沿海の社會經濟制度の變容 村上 衛
 東方學における對象の論理學的研究 白須裕之
 中國家具とその使用に關する研究 高井たかね
 二〇世紀臺灣農業經濟の變容と自治・自律 都留俊太郎
 南宋期道學の經書解釋 福谷 彬
 中國古代中世の官制史 藤井律之
 東西資料によるモンゴル時代の文化交流と諸制度の研究 宮 紀子
 文字定義情報に基づく文書表現系に關する研究 守岡知彦
 近世以降日本における中國の戯曲と小説の受容 楊 維公
 人文學研究部
 近世社會解體過程の研究 岩城卓二
 近代西洋音樂史 岡田曉生
 戰前期日本の工業化と華僑ネットワーク 籠谷直人
 イギリス・アイルランド近現代史 小關 隆
 技術・自然・(ポスト)現代性思想——哲學的探求 佐藤淳二
 近代天皇制の文化史的研究 高木博志
 近代日本美術と西洋 高階繪里加
 人種・エスニシテイ論 竹澤泰子
 精神分析的知の思想史的位置づけ 立木康介

- 西アフリカと南アジアの宗教、憑依、間身體性 石井美保
 近代トランスコーカサス(特にグルジア)における匪賊 伊藤順二
 近現代日本の社會史、思想史、技術史 KNAUDT, TH
 近現代日本の社會經濟と環境 小堀 聰
 東アジアにおける生命科學と「自然」 瀬戸口明久
 〈非人間〉の歴史と記憶の存在論 直野章子
 近現代日本の社會運動・社會思想 福家崇洋
 農業史の再構築 藤原辰史
 フランス象徴主義と文學的モデルニテ 森本淳生
 共同的認識實踐の歴史 岡澤康浩
 近代日本民俗誌システムの研究 菊地 暁
 啓蒙と文學——アドルノ美學における「人間性」の位置づけ—— 藤井俊之
 近代フランス文學・藝術における「遊戯」の再検討 藤野志織

事業概況

- ・人文研アカデミー講演會「現在性におけるフーコー〜イタリヤ學派の視點から〜」
 二〇二二年 四月一日〜五月九日 (Web 配信)
 生政治批判 Maurizio LAZ-ZARTO
 西洋文化の現在性および普遍化の考古學的診斷

- フーコーのチュニス講義 Orazio IRRERA
 コメンテーター 市田良彦、佐藤嘉幸、廣瀬 純、箱田 徹
 ・Kyoto Lectures 2021 on Zoom
 二〇二二年 四月二三日 (Zoomで開催)
 Studying Women and Networks in the Late Tokugawa Period: The Case of the Rai Family 講演者 Bettina Granlich-Oka (上智大學)
 ・よみがえったインソップ繪卷「繪入卷子本」伊曾保物語Ⅱ 刊行記念トークイベント
 二〇二二年 五月二二日 (Zoomで開催)
 伊曾保物語の「ばすとる」(羊飼い)——キリシタン版と國字本をつなぐことよび 岸本惠實 (大阪大學)
 伊曾保物語と翻譯底本——文字と畫を比べながら 兵頭俊樹 (和歌山大學)
 奈良繪本・繪卷としての西洋文學——繪入卷子本「伊曾保物語」の意義 ローレンス・マルソー (イタリア東方學研究所)
 (イタリア東方學研究所) デイスカッサント 荒木浩 (國際日本文化研究センター)
 ・人文研アカデミー二〇二二年出版記念連續セミナー『チベットの歴史と社會』
 二〇二二年 六月一九日 (Zoomで開催)
 言語文化の繼承と變容・廣がりゆくチベット語の世界 星 泉、池田 巧
 二〇二二年 七月一七日 (Zoomで開催)
 日常の信仰と世界觀：チベットの民間宗教とボン教 村上大輔、小西賢吾

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom

二〇二一年 五月二十八日 (Zoomで開催)
Datsueba's Role in Structuring Religious Landscapes: Rissshakuji in Yamagata and the Pilgrimage Route to Atsuta Shrine
講演者 Chihito Saka (龍谷大學)

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom

二〇二一年 六月十八日 (Zoomで開催)
Scriptures and Their Deployment: Two Examples of Sacred Works (Shogyō 聖教) from Early Medieval Japan
講演者 Brian Ruppert (龍谷大學)

・ 人文研アカデミー二〇二一年夏期公開講座『名作再讀』
二〇二一年 七月一日 (Zoomで開催)

エッセナー・ハワード 『明日の田園都市』とその日本での展開について 守岡知彦
憑依とうた——桑原武夫と金井美恵子の批評から考える 石井美保
豊穣な言語の森を俯瞰する『言語類型地理論』 池田 巧

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom

二〇二一年 七月十九日 (Zoomで開催)
Health and Modern Warfare: Locating Medical History in Japan's Long Nineteenth Century
講演者 Ken Daimaru (ペリ大學)

・ 人文研アカデミー二〇二一年連続セミナー『ほんこの文字の話〜人文研の蔵書と蔵書印〜』
二〇二一年 八月二十六日 (Zoomで開催)

手取り足取り——基本の部首—— 矢木 毅

二〇二一年 九月二日 (Zoomで開催)
藏書でみる人文研の歴史 矢木 毅
二〇二一年 九月九日 (Zoomで開催)
藏書家の群像 (一)——旅する書物—— 永田知之

二〇二一年 九月十六日 (Zoomで開催)
藏書家の群像 (二)——大きな印と小さな印—— 古勝隆一

・ 人文研アカデミー二〇二一年オンライン連続セミナー『龍門石窟——研究の軌跡と現在』
二〇二一年 十月七日 (Zoomで開催)

龍門石窟の造像と石刻文——その歴史と近代人の視線 稲本泰生
二〇二一年 十月十四日 (Zoomで開催)
北魏洛陽の宮殿と寺院を掘る 向井佑介

二〇二一年 十月二十二日 (Zoomで開催)
唐代龍門石窟と淨土信仰 倉本尙徳
二〇二一年 十月二十八日 (Zoomで開催)
龍門石窟と周邊の僧院——奉先寺址の發掘 フォルテ・エリカ

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom

二〇二一年 十月十一日 (Zoomで開催)
Emperor of Shadows: Napoleon and the Japanese Imagination (1800-1900)
講演者 François Lachaud (フランス國立極東學堂)

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom
二〇二一年 十月二十八日 (Zoomで開催)

Weather and Local Knowledge: Forecasting Strategies in Japanese Small-Scale Fisheries
講演者 Giovanni Bultari (ヴェネツィア・カ・フォスカリ大學)

・ 北白川 EFEO サロンワークショップ『Aspects of Lived Religion in Late Medieval and Early Modern Japan』
二〇二一年十一月二三日 (Zoomで開催)

・ 人文研アカデミー二〇二一年シンポジウム『考古学からみた古代東アジアの馬利用』
二〇二一年十一月二二日 (Zoomで開催)
ウマの家畜化——騎乗までの道程 中村大介 (埼玉大學)

駿馬と鈍牛——中國古代の車文化史 岡村秀典
牧馬の育成——中國古代養馬史の再構築 菊地大樹 (蘭州大學)

馬車から騎馬へ——胡服騎射から舞馬・擊毬まで 向井佑介
鐘の出現——騎馬東傳の原動力 諫早直人 (京都府立大學)

司會 篠原徹 (滋賀縣立琵琶湖博物館・國立歴史民俗博物館)

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom
二〇二一年十一月二十九日 (Zoomで開催)
Thoughts on the Cult of Tokugawa Ieyasu as the Great Avatar
講演者 Timon Screech (國際日本文化研究センター)

・ 『GRHL II』刊行記念シンポジウム 文學に

働く力、文學が発する力——權威・檢閲・文學場

二〇二二年十二月一日

於 京都大學人文科學研究所本館セミナー室1

(同時にZoomで配信)

文學の領分——文學は何を伝えるのか

野呂 康 (岡山大學)

レチフ、あるいは、どぶ川のルソー——文學場の

周縁とマイナー作家性

森本淳生

十九世紀末フランスで裁かれた文學、その後——

リシユパン、マンデスを例として

中畑寛之 (神戸大學)

コメンテーター 山上浩嗣 (大阪大學)

・人文研アカデミー二〇二二「統治と民衆文化からみる十九世紀日本——平野克彌『江戸遊民の擾亂』を読む」合評會

二〇二二年十二月二日 (Zoomで開催)

著者 平野克彌 (UCLA)

評者 成田龍一 (日本女子大學名譽教授)

内藤千珠子 (大妻女子大學)

司會 竹澤泰子

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom

二〇二二年十二月十五日 (Zoomで開催)

The circulation of Playful Energy in Early Modern

Japanese Popular Culture

講演者 Laura Moretti (ケンブリッジ大學)

・ボードレール生誕二〇〇周年記念「時間—生

藝術の研究—ボードレールとその受容

二〇二二年十二月十八日、十二月十九日

於 京都大學人文科學研究所本館4階大會議室

(同時にZoomで配信)

I. ボードレール研究

『人工樂園』における時間と空間

タイムマシン・ボードレール

ボードレールにおける『現在の表現』とジャーナリズム

渇きと時間・分裂と『悪の花』のカラーージュ

II. その受容と廣がり

ボードレールとヴァレリー: 「蛇」をめぐる變奏

ボードレールが終わったところから始める: マラルメの文學的〈生〉について

III. 哲學、音樂、作家

瞬間と疲勞: 初期レヴィナスにおけるボードレール解釋

「萬物照應」ドビュッシューとボードレールの時間

多様性と「生命力の移動」

・ Kyoto Lectures 2022 on Zoom

二〇二二年 一月二十六日 (Zoomで開催)

Rakugo as Variety Entertainment ⇄ Rakugo as Literature

講演者 M. W. Shores (シネーリ大學)

・ Kyoto Lectures 2022 on Zoom

二〇二二年 二月一四日 (Zoomで開催)

Law, Justice and International Relations at the Dawn of the Meiji Restoration. The "María Luz" Incident

講演者 廣田大地

清水まさ志

廣田大地

佐々木稔

小倉康寛

坂巻康司

鳥山定嗣

中畑寛之

森本淳生

服部敬弘

青柳いづみこ

平野啓一郎

講演者 Giorgio Fabio Colombo (名古屋大學)

・ 第一七回 TOKYO 漢籍 SEMINAR 『デジタル漢籍』

二〇二二年 三月 七日

於 一橋大學一橋講堂中會議場

開會挨拶

デジタル漢籍の誕生

デジタル時代の漢籍の楽しみ方

永崎研宣 (一般財団法人人文情報學研究所)

漢字から漢語へ、漢語から漢文へ

安岡孝一

司會 永田知之

・ Kyoto Lectures 2022 on Zoom

二〇二二年 三月一八日 (Zoomで開催)

Urbane Waters. The Worldliness of Gion, ca. 1825

講演者 Stephen Roddy

(サンフランシスコ大學)

所員動靜

招へい研究員

・ 平野 克彌 UCLA 歴史學部准教授

人種主義の環太平洋的形成: なぜアイヌはイン

ディアンと比較されたか? (文化生成研究客員部

門)

受入教員 竹澤教授

期間 二〇二二年 九月 一日~二〇二二年十二

月二五日

招へい外國人學者

・ MARCEAU, Lawrence Edward イタリア東方

學研究所客員研究員

- 近世日本における『イソップ寓話集』の受容
 受入教員 稲葉教授
 期間 二〇二〇年十二月一八日～二〇二一年十二月一七日
- ・MARQUET, Christoph Michel フランス国立極東學院院長
 民畫の東西比較研究 受入教員 稲葉教授
 期間 二〇二一年 六月二八日～二〇二一年九月五日
- ・HUBBARD, James Bert スミス大學教授
 中國・日本佛教文獻・佛教と腦科學に關する研究
 受入教員 Witem 教授
 期間 二〇二一年 十月一日～二〇二二年 九月三〇日
- ・Dujeccaidan 青海民族大學准教授
 日本におけるチベット學と西域研究の展開——宗教哲學と佛教文化を中心に——
 受入教員 Witem 教授
 期間 二〇二二年 二月一〇日～二〇二二年 七月三十一日
- ・ORLAIN, Rebecca Chiyoko メイヌース大學講師／准教授
 The Transnational World of Japanese Popular Culture 受入教員 竹澤教授
 期間 二〇二二年 三月八日～二〇二二年 三月一九日
- 外國人共同研究者
 ・頼 霈澄 臺灣大學文學院中國文學系博士候選人

人

- 晚明清初における僧詩選集の研究
 受入教員 永田准教授
 期間 二〇二〇年十一月一六日～二〇二一年十一月一五日
- ・餘 柯君 復旦大學博士後
 金剛智、善無畏梵漢對音譜と漢語中古音の研究
 受入教員 永田准教授
 期間 二〇二〇年十一月二四日～二〇二一年十一月三日
- ・易 丹韻 早稻田大學文學院研究科博士後期課程
 佛教宇宙觀の中國的展開に關する研究——五十三世紀の「世界圖」制作を手掛かりに——
 受入教員 倉本准教授
 期間 二〇二二年 五月六日～二〇二三年 五月五日
- 外國人研究生
 ・石垣 章子
 漢譯佛典として位置付けられた疑偽經典の成立と思想の系譜
 受入教員 船山教授
 期間 二〇一八年 四月一日～二〇二三年 三月三十一日
- ・趙 芙蝶
 人文科學とデジタル デジタル人文プロジェクト
 トユーザー指向のデザイン
 受入教員 Witem 教授
 期間 二〇一九年 十月一日～二〇二一年 九月三〇日

・Qianqing Huang

- 一九二〇年代、三〇年代の日本における被差別部落
 受入教員 竹澤教授
 期間 二〇一九年 十月一日～二〇二二年 九月三〇日
- ・王 含元
 中國北方青銅器文化の社會變動
 受入教員 岡村教授
 期間 二〇二二年 一月一日～二〇二二年十二月三十一日
- ・肖 文遠
 日中比較の視點からみた曆書時間の近代化
 受入教員 村上准教授
 期間 二〇二二年 一月一日～二〇二二年十二月三十一日
- ・Pelayo Prieto, Miguel Angel
 和食前の日本料理：中世・近世日本料理への新しいアプローチ
 受入教員 藤原准教授
 期間 二〇二二年 四月一日～二〇二三年 三月三十一日
- ・陳 佩瑜
 中國清末・民國における「國體」の概念
 受入教員 永田准教授
 期間 二〇二二年 十月一日～二〇二二年 三月三十一日
- ・梁 灝
 劉智『天方典禮擇要解』の中の文化交渉——朱子學との關連に着目して——
 受入教員 中西准教授

期間 二〇二二年 十月一日～二〇二三年 三月
三十一日

出版物

紀要

- ・人文學報 第一一七號（紀要第一九三冊）
二〇二二年 五月三十一日刊
 - ・人文學報 第一一八號（紀要第一九四冊）
二〇二二年十一月三〇日刊
 - ・東方學報 九六冊（紀要第一九五冊）
二〇二二年十二月二十五日刊
 - ・ZINBUN number 52
二〇二二年 三月刊
- 研究報告その他
- ・センター研究年報二〇二一
二〇二二年 二月二十八日刊
 - ・シナリチベット系諸言語の文法現象3 方向接
辭の機能 荒川愼太郎、池田巧編
二〇二二年 二月二十八日刊